慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Leopold v. Rankeの歴史認識の一面に就いて
Sub Title	
Author	舟田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.4 (1925. 12) ,p.1(469)- 29(497)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19251200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學　第四卷　第四號　大正十四年十二月

Leopold v. Rankeの歴史認識の一面に就いて

Er will blos zeigen, wie es eigentlich gewesen.—v. Ranke, Geschichten der romanischen und germanischen Völker, Vorrede, s. VII

Fern, fern sehe ich mein wahres Ziel. Bei diesem wahren Ziel, hoffe ich, finden wir uns zusammen, es seien auch unsere Bahnen verschieden.—v. Ranke, Zur eigenen Lebensgeschichte, s. 139.

ランケの史學研究の特徴は、第一にはその批評的なる所に、第二にはその藝術的なる所に、而して第三にはその哲學的なる所に、否、その或る時期に於ては、「これ等の三要素が互によく均衡を保ち、その

何れも他の特性を毀損せざる所に存した」とは、史家 Sybel が彼の追悼演說中に於て述べて居る所である。(H. v. Sybel, Vorträge und Abhandlungen, S. 299.) この中、第一の批評的研究は、彼が事實尊重の精神、或はその歷史に對する客觀性の要求に基くものであるが、これは學者の等しく承認する所であるから、今更絮說するを要しない。第二、その藝術的なりとせらるゝは、その作物中に於て取扱はるゝ人物乃至事件が、繪畫や彫刻に接する場合に於けると同樣なる美的印象を吾人に與ふるが爲めである。これはその作の全部と云はざる迄も、少くともその大部分について云はれ得る言である。彼は頗る文章に巧で、表現の術に秀でて居つたから、彼の作を繙くものをしてさながら繪畫陳列館の中にあるが如き想を起さしむのであつた。然しながら彼の藝術的なりしは單にそれのみではなかつた。彼がその研究せんとする事物に對するや、全然藝術家的態度を以てこれにのぞんだ。卽ち彼は事實の爲めに事實を觀るのみで、他に何等の目的も持たなかつた。彼の態度は、云はゞ全く觀賞的であつた。更に又彼は創作的方面に於ても、藝術家に必要なる想像力、より適切に之を言へば W. v. Humboldt の所謂 Ahndungsvermögen 或は Verknüpfungsgabe を多分に具へて居つた。彼はこの能力によつて歷史の表には現はれざる、從て又單なる感受性によつては知覺し得ざる或るものを直觀し、かくして彼はそれ丈けでは孤立せる事實を互に關聯せしめたのであるが、然しこれ等のことを詳しく叙ぶるは予の目的ではない。予がここに問題とせんとするものは、その第三の哲學的と云ふことである。彼の歷史は如何なる意味に於て哲

學的であり、又那邊迄哲學的であつたか、これが予の興味の中心を占むる點である。

一般に哲學は普遍の學である、現實全體に關する認識であるとせらる。今この解釋を歴史に應用すれば、歴史的世界の全體に關する普遍的考察は歴史の哲學的考察であると云ふことが出來る。換言すれば歴史の世界史的考察はその哲學的考察であると云ふことが出來るが、ランケがこの普遍的考察、或は世界史的考察を歴史研究に要求したことは事實であつて毫も疑ふの餘地はない。彼は機會ある毎に特殊に注意すべきことと同時に普遍に着眼すべきことを力説して居るのであるから、Sybel がランケの歴史を以て哲學的であるとしたのも、彼が取扱ふ世界の對象をばすべて世界史家の立場から考察した所よりいふものであると解してよいのである。(尤もこのことについてはなほ詳しく述べねばならぬことがあるがそれは暫く保留する。)

然しながらこの普遍的とか、世界史的とか云ふことは一義的に解釋せらるべき詞ではないのであるから、ランケの所謂世界史的と云ふ語が、如何なる意義を持つて居つたかを明かにせんが爲めに、先づ此の概念の内容を歴史的に究めて見ようと思ふ。

ランケ以前に於ては世界史なる概念は二樣に解せられて居つた。一は Voltaire より出てたるもので、他は Kant の語をかりて言へば Philosophische Fakultät より生じたるものと云ふことが出來る。前者は世界に於ける一切の史的事件を以て歴史的記述の對象となすものである。これを詳言すれば、從來の所

謂世界史なるものは、名は世界史であるが、實は西洋諸國の歷史に過ぎなかつたので、決して眞の意味で世界史と云はるべきものではなかつた。世界史は然しながら文字通りには、單に西洋歷史に限らるべきものではない、東洋諸國の歷史も亦これと同等の權利を以て、その研究範圍内に入るべきものである。又從來歷史は主として政治の歷史であつた。然しながら史學の對象は必ずしも政治にのみ限らるべき理由はない、およそ人間精神より現はれ出づる歷史的諸現象は、何れも等しく歷史の記述すべきものであると。これが世界史に關する一方の解釋であるが、この解釋が Voltaire の歷史に於て具體化せられて居ることは、その大著 Essai sur les moeurs et l'esprit des nations (1754) 及び後にはこの書の序說となせる Philosophie de l'histoire (1756) を觀れば明白である。この Voltaire の史觀がその後獨逸の史學研究家に影響を及ぼし、かくて第十八紀の後半に於ける獨逸の史學が著しく世界史的となり、又文化史的となつたことは事實がこれを證明して居る。今一々例證を擧げてこれを證明するの要を見ないが、唯叙述を進むる便宜上 Fueter が Voltaire 派の一人となしたる Schlözer の言をこゝに引用しよう。彼によれば「世界に於けるあらゆる民族は何れも世界史に屬するものである。單に祖國のみを念頭におかず、國民的自負心を懷かず、およそ人類の社會を營む所、曾てその役目の演ぜられたる舞臺、これ等は皆世界史の眼を向くべきものである。如何なる處と雖も世界史より觀れば皆同等であつて彼を重んじ此を輕んずべき理由はない。であるから例へば神の選民や希臘、羅馬をのみ說くは偏頗である。世界史は黃河

やナイル河によつて、その好奇心を娯ましむるを得るとは恰もタイバー河やワイクセル河によりてしかなし得ると毫も異なる所はない」と。更に又彼は人類活動の表現たる歴史現象は、何れも政治史と同等の意義を有するもの、從て國家、商業、藝術、科學等の歴史は、すべて歴史研究の對象となるべきものであるとする。(O. Lorenz Die Geschichtswissenschaft in Hauptrichtungen u. Aufgaben, 1886. s. 29)

斯くの如き、文化史的とも云はれ得べき世界史に對して、かの所謂哲學的の世界史は、人類の發展とその運命とを、統一的に解釋せんが爲めに、より高きイデヤをかり來るもの、例へば Herder が Humanität の立場より、Kant が Naturplan より、又 Fichte が Weltplan より、更に Hegel が Freiheit を原理として歴史を説明せるが如き、皆同一の見地よりするものであるが、これを稱して哲學的世界史と云ふことが出來る。史家 Schlosser は上に述べたる二樣の世界史を區別せんが爲めに、前者をば Weltgeschichte と稱し、後者をば Universalhistorie と名けて居る、そしてこれは人類を一統體と見てその歴史を論ずるもの、彼はこれに反して個々の民族の歴史を時代の順序に從つて叙述するものであると附言して居る。(a. a. O. S. 32)

この名稱は如何にあらうと、かゝる二種の世界史の區別せらるべきことは明かである。而してこの兩者が一時相爭つたことも事實である。例へばかのヘルデル對シュレーツァーの論爭は實にこの兩傾向の爭であつたのであるが、前者はシュレーツァーの世界史に關する考を以て卑俗なりとし、人類歴史中意

義ある民族の選擇は宗教的或は道德的理念によりてなすべきものなるとを要求したるにシュレーツァーはこれに對して各民族は同等の價値を有するものであるから、特に宗教的、道德的理念を要しないとする。この兩者の見地の相違よりして、例へば猶太人に對する見解も殊なり、ヘルデルはこれを以て世界史的酵母であるとするに對して、シュレーツァーはこれを以て世界史上、特に重大なる役目を演ずるものではないとする。

然らばランケの世界史とは如何なるものであつたか。そは Schlosser の所謂 Universalhistorie か、或は彼の所謂 Weltgeschichte か。余の觀る所によれば彼の世界史はその何れでもなかつたと云はねばならない。先づ前者の Universalhistorie— これは歷史哲學と稱せらるべきものであるが、ランケがこの種の世界史に反對したことはその Über die Epochen der neueren Geschichte に於けるドーヴェの序言中に述ぶる所によりても明かである。卽ちランケは、その三十年代の手記中に於てはフィヒテの歷史哲學を批難し、四十年代に於てはヘーゲルの世界史に反對して居るのである。然しながらランケの立場よりすれば單にこの兩者にのみ反對すべきものではない、すべて超越的理念を設け、これより概念的に歷史を說く所謂演繹的、構成的歷史哲學に對しては、彼は全然排斥的態度を取らねばならなかつた。ランケの如く飽く迄も史實に忠實に、そがありし通りに史的事象を記述するを以て歷史の任務となしたる史家の眼から觀れば、理性の本質上、歷史はしか發展すべきものとしたり、歷史的事實は、此事實を待たずし

て知らるべき史的發展を例證する手段に過ぎずと思惟する歴史哲學に一致し得なかつたことは云ふ迄もない。又個性と自由とを尊重し、概念的に解釋し得ざる個人や民族の内的生命に重きをおくランケにとりては、世界史を以て世界精神の論理的發展であると見做す哲學者の見解に贊意を表し得なかつたことも明かである。然しながらランケは徹頭徹尾、歴史哲學に反對したのではなかつた。彼の反對した所はその方法にあつたので、歴史哲學の精神には異議をさしはさまなかつた。否彼はこの精神を以て當然なるものと思惟した。彼は「哲學的研究は、その傾向に於て眞なるものを有して居る。これは當然なる根據、即ち普遍的に歴史を考察せんとする要求に基くものである」といひ、(v. Ranke, Über Epochen der neueren Geschichte, 8. Aufl. 1921. Vorwort, s. 5.) 又彼が三四十年代 (1831-49) の一般感想錄中には、歴史哲學と云ふ題名の下に「この要求は不可避的、自然的、人間的である。然し崇高にして難事である。人類活動の内部に潜める糸、即ち人類そのものゝ中に發展し、而して顯現し來る精神を識認し得るものあらば、そは實に神知の一部を獲得するものと謂ふべきである。然しながら此事はしかく迅速になし得べきものであらうか。その神祕的なる痕を識るは唯々深遠なる知識によつてのみ可能である。哲學派と歴史派との差別は、要するに次のことに歸着する。即ち前者は淺薄皮相、一切を混淆する雜駁なる知識より强壓的に結果を引き出し來るに反し後者は事物の本質を理解せんとし、その推移するがまゝを觀察する、かくして是より生じ來る最高の結果を豫感する。」と。(v. Ranke, Zur eigenen Lebensgeschichte,

p. 570.）　彼は普遍的考察と云ふ意味に於ける哲學的精神の史學研究に必要なるものなることは充分認めて居た。然しながらこの普遍的考察をなさんが爲めに、初めより一定の原理を設け、これより特殊を演繹する構成的方法には服し得なかつた。彼にとつては特殊的なる、しかも確實なる史實を基礎とし、これより普遍に達することこそ最も着實にして穩健なる道であつたのである。彼はいふ「思辨的思考の追求と人類狀態の理解との中、何れかより多く眞理を有し、何れかより多く吾人を眞實在の認識に接近せしむるや。余は後者なりと思ふ。そはこの方法によれば誤謬に陷ることが少ないからである。勿論吾人の歷史は斷片に過ぎない、往々不明朦朧たる所はある。これは歎ずべきことであるが、然し吾人の知る所も又確かに多い、であるからこれより推して他の不可知なるものも明かにすることが出來る。かくて全體は完全なる眞理として把握せらるゝに至るであらう」と。（(a. a. O. s. 163）　彼はこゝに思辨と直觀と、又普遍より特殊への道と特殊より普遍への道とを相對立せしめ、後者を以て眞理に達する手段なりとした。換言すれば彼は後天的に事實を究め、特殊より進んで普遍を體得せんとしたのであつて、先天的に論理的に普遍より特殊に下る道は初めより彼の採らざる所であつた。彼は已に千八百二十三年中に於て「余は先天的なるものをば棄て顧みない。何となれば余の方法はすべて後天的であるから」と云つて居るが、（a. a. O. s. 117）これは最も直截にその方法を言ひあらはしたものと云ふべきである。

彼は、先きにも云つた樣に、特殊に注意すべきをば、機會ある毎に說いた。彼によればこの特殊の事

實に對する興味は眞の史家たるに必要なる條件の一つである。史家は事實を事實の爲めに觀、何等それ以外の目的を以てせざること、藝術家が恰も美を觀賞するが如くでなければならない。又猶、花を見るものゝ唯々その美を娛むが爲めにして、科學者の如く、その何種に屬するやを顧慮せざるが如くでなければならない。彼はかくの如く個々の事實を重んじたのであるが、然しながら彼にとつては、事實の認識それ自らは目的ではなかつた。彼にはそれ以上の目的が存した。卽ち普遍である。彼は Niebuhr を激賞して、近代にも史家の存し得るを彼によつて確信するに至つたと言ひながらも、(a. a. O. s. 59.) しかもランケが彼に慊らなかつたのは、結局、その歷史には全體の關係、卽ち普遍に對する考察が缺けて居たが爲めである。(Über die Epochen. d. n. Gesch. Vorwort s. 5)彼はこの普遍に着眼すべきことを敎壇よりも往々說いたことは、Sybel の言によつて明かである。卽ち彼の云ふ所によれば、ランケは或る時、この普遍に關し、己れの史觀とヘーゲルの歷史哲學との關係を審にのべたと云ふことである。勿論 Sybel はその講義の內容を擧げては居ないが、しかしこの場合彼の說きし所は先に引用した一般感想錄中の語とその趣意に於て殊なる所はなかつたであらう。卽ち彼は、普遍を以て哲學に於けると同じく歷史にも必要なると、然しながらこれを重んずるの餘り特殊を不問に附してはならない。普遍は特殊よりして徐に進み行くべきもの、普遍を初めにおきてこれより特殊を說明してはならぬと說いたに相違ない。彼にとつては特殊それ自は目的ではない。目的は普遍に存する。然しながらこの普遍は確實なる基礎を

必要とする、Sybel の言ふ所によれば、ランケはその學生に說いて「確固たる基礎をおかずして科學的建物を建てゝはならない。然し又土臺を据ゆることのみを以て、その職分の最高なるものと思惟してはならぬ」と云つたといふことである。これによつても明かなるが如く彼は事實と普遍とを結び付けようとしたのである。彼は云ふ。「普遍なくんば特殊は冷却し、特殊なくんば普遍は空想に墮す」と。彼から觀れば、事實にのみ膠着するものは眞の史家ではない。然しながら普遍のみに着眼する者も亦眞の史家と云ふことは出來ない。史家の本質はこの兩者を結合せしむる所に存する。かゝる見解よりして彼はその史學研究に於て、Hegel の精神と Niebuhr の方法とを結びつけんとしたのであつた。

彼はかくの如く普遍を重んじた。然しながら彼はこの故に直ちに神學的、形而上學的普遍概念に逃げ込むことをしなかつた。否、それは彼には出來なかつた。初めに普遍概念を構ふるにしては、彼は餘りに經驗的であり、餘りに事實を重んじた。それであるから彼の普遍史、或は世界史なるものは、人類を初めより一統體と見做して、その發展と運命とを論ずる樣な世界史ではあり得なかつた。その出發點は經驗的史的事實であつて普遍的概念ではなかつた。これは彼の客觀性尊重の精神に關係して居るものである。彼は如何なる種類のものたるを問はず、すべて先入の普遍概念によつて事實の拘束せらるゝことを欲しなかつた。彼は普遍を重んじながら、なほ當時の歷史哲學、否一般に演繹的歷史哲學に反對する理由もこゝに存したのである。かく觀來れば彼の世界史は、Schlosser の所謂 Universalhistorie ではな

かつたと云はねばならない。

然らば彼の世界史は Schlosser の規定した樣な意味での Weltgeschichte であつたか。否、そうではなかつた。ランケの世界史は唯個々の民族の歷史を時代の順に從つて記述するものではない。彼はよく「普遍」と云ふ語を使用して居るが、それは自然科學的意味に於ける普遍、卽ち特殊なるものに共通なる要素より構成せらるゝ類概念のもつ普遍でもなければ、單に個々分離した事物の總和でもなくして、相關聯せる限りに於ての全體である。彼より觀れば特殊なるものは特殊なるものとして孤獨的に存在するのではなくして、他の個別的なるものと相關聯して存在するのである。彼は云ふ「一地方の歷史は一國の歷史に、個人の歷史、卽ち傳記は國家や敎會に於ける出來事の歷史に、又國民史や、一般史の一時期の歷史にも關係する。然し又これ等すべての時期は吾人の名けて Universalhistorie (Schlosser の解釋せるが如きものにあらず。) となす大なる全體に屬するものである」と (Ranke Über die Epochen d. n. Geschichte, Vorwort, s. 6.) いひ、又「國民は互に影響しながら現はれ、そして互に結び付きて生ける全體をなす」と。彼は個々のものゝ關係、聯絡を、而してその限りに於ての全體を個々のものに對して普遍となし、これを理解することに重きを措いたことは諸所に見えるのである。かくの如くランケの普遍は個々分離せるものをよせ集めたるものではなくして、相關聯せるものの全體である。この意味での全體の歷史がランケにとつては Universalgeschichte であり、Weltgeschichte であり、又 allgemeine Geschichte

であつた。であるからそれ自では立派な歴史をもつて居るものでも、それが國民相互の關係中に入つて來ないものはランケの世界史には屬しない。又相關聯して居るものを切り離してそれ丈けで觀察し、その結果を順次に記述するものも彼の世界史ではない。それ故、個々の民族の歴史を時代の順序に從つて排列すると云ふ意味での世界史は、彼の立場よりすれば決して眞の世界史と云ふことは出來ないのである。彼はその大著「世界史」の序言に於いて、Weltgeschichte と Geschichte der Welt とを區別し、後者を以て民族史のよせあつめに過ぎない、これには民族相互の關係連絡なるものが看却されて居ると云ひ、更に「この關係を認識し、すべての民族を結合し、支配する大事件の過程を明示する所に、實に世界史學の任務は存するのである」と。(v. Ranke, Weltgeschichte, Vorwort, s. 4)

併しながらかゝる意味に於ける世界史、即ち國民相互の關係交渉に觀點をおいて叙述する世界史は人類全體の歴史ではなくして、その一部の歴史とならねばならぬ。勿論彼はその一千八百三十六年の就職講演中に於て「學に特有なる認識欲は、人事に關することは一として沒交渉、無關係なるものなしと云ふ確信からして、あらゆる世紀、あらゆる國の全範圍を歴史は包括するに至るであらう」と云つては居るが、(v. Ranke, Abhandlungen und Versuche. I. samml. s. 291) 併しこゝにいゝ「あらゆる世紀あらゆる國」は文字通りに解すべきものではない、相關聯する限りに於いての「すべて」であると云ふことは彼が後に「世界史」中の序言中に於て述べて居る所を見ても明かである。事實又彼は「あらゆる世紀、

あらゆる國をその世界史に於て取扱つては居なかつた。勿論その世界史は未完に終つたが、しかしこれが幸に完成する樣なことがあつたにせよ、それは彼のなす所ではなかつたであらう。」(Rickert, Geschichtsphilosophie, Philos. in Begim des XX. Jahrhunderts, s. 397) 彼の世界は相關聯する限りに於ての諸國民、或は諸民族の全體であつたから、一般歷史研究に從事するものより見れば人事は一として無關係沒交涉にあらず、そは如何に小なるものと雖も、それ自體知得の價値あるものであるとしても、それが全體に關係あらざる限り、或は相關聯せるものゝ一部たらざる限りは、彼の世界史中に入ることは出來ないと云はねばならぬ。それ故、彼の世界史は、リッケルトの言つた樣に「論理的意義に於ける最後の、最も廣汎なる歷史的全體ではなくして、吾人に知られたる人類史の一部であつた、……歷史的材料はこれを世界史的に取り扱ふべきものとのランケの要求は、主として單に一國民に限らず、一定の文化界に於ける各國民の連絡關係を研究する所にあつた。」(a. a. O. s. 398) であるから部分の相關聯して全體をなすと云ふ意味での普遍に觀點をおけば、ランケの史學研究は經驗史家の立脚地を出でなかつたと云ふべきである。

以上吾人はランケの世界史とは如何なるものであり、その普遍とは何を意味したかを究めたのであるが、然し上に述べた事丈けよりしてランケの歷史認識を規定すると云ふことは、ランケの史學研究に對して不正であるのみならず、先に引用せるSybelの言をも正當に解釋せるものと云ふことは出來ない吾

人は便宜上、先に彼の言について保留する所あつたが、彼がランケの作物を以て何れも世界史家の立脚地から出來たものと云つた時、その「世界史家の立脚地」と言ふ名辭が何等の意義をも持たず、唯漠然使用せられたのではなかつた。尤も彼は世界史家が世界史を取扱ふ時、その世界史の範圍、如何については、明かに規定する所はなかつた。唯普遍的に歴史を考察するものと云ふ程の意味に之を解した樣であるが、然しそれは今こゝでは問題とならない。彼は「世界史家の立脚地より」と云つた時、同時に彼はその見方が內的であると云ふ意味を含ましめて居たのである。換言すれば單に史的現象として外部にあらはれたるものを廣く觀るのみならず、これを通じてその奧底に潛在する或るものを認めんとしたと云ふ意をこめて居たのである。これは當然のことである。何となれば、ランケの如く個々の事象を羅列するのではなく、それ等相互の關係をつけんとすれば、勢見えざる或るものを體得せねばならぬからである。Sybel はランケのこの內的なる或ものを明かにせんが爲めに、その就職講演中の語を引用して居るが今その大要を云へば、歴史は相ついであらはれ來る事件を出來る丈け精密に記述しなければならぬ。しかし歴史の任務はそれで終れりといふことは出來ない。歴史は實に人類を導く幽奧神祕なる生命のはたらき迄入り込まねばならぬ。歴史は各時代に於て人類の向ふ方向と、そが努力し、收得したる所のものを發見せねばならぬ。事件の中核をきはめ、その神祕をさぐり、變化興亡のよつて生ずる最後の源泉を認識せねばならぬ。而してこれを認識すると云ふことは實に神知の一部を得ると云ふことである。しか

しながら吾人は之れを得んが爲めに神學や哲學の助をかりるものではない。その道は歴史である。歴史認識は、この神知に達せんが爲めの手段である。神意を知るは實にその終局の目的である。とこれが Sybel が引用したるランケの所説の大意である。(Ranke, Abhandlungen u. Versuche, I. Samml. s. 28 iff.)

以上の言によつて明かなるが如くランケは史的現象のみならず、更に云はば史的實在をも認識し、かくして神意を體得せんと欲した。而してこれが實に彼の見て以て歴史認識の最後の目的とする所のものであつた。哲學は普遍の學であると共に、これと關聯して原理の學あり、實在の學であるとせらるゝ。ランケは史的實在をも把握せんとした所から見れば彼はこの點に於て哲學的でなかつたらうか。否、彼は神意をも體得せんとした所から見れば宗教的であつたとも云はれやう。彼自分もその歴史研究は哲學的宗教的興味に基いて居るものであると云つて居る。即ち彼はその友 H. Ritter に與へたる書簡中に於て世人は余が哲學的或は宗教的に嚴肅ならざるの故を以て余を責めんとする。尤もこゝにいふ嚴肅とは一定の體系中にあられたる何等かの意見を持し、これを基礎として一切を説くことである限り、或は哲學上、宗教上無定見にして研究に從事するものは不眞面目であると見らる限り、余を責むるも敢て不當ではない。然しながら余を以て哲學的、宗教的興味に缺くとなすは噴飯の至りである。何となれば余をして歴史研究をなさしむるに至つた動機は、實にこの興味に外ならなかつたからであると云つて居る。(v. Ranke, Z. eigenen Lebensgeschichte, s. 238-9) 彼はかく自白して居る程であるから、彼の史學研究

はその精神に於て、その動機に於て、哲學的、否宗教であつたと云つて差支なからう。然しながらその方法に於ては、彼は當時の哲學的乃至神學的本流とも見らるべき合理主義に從ふことは出來なかつた。從て又彼はその精神を歴史研究の表にあらはして來ることは出來なかつたと云はねばならぬが、然しこの主張は當然の理由を擧げ、相當の説明を加ふるにあらざれば獨斷的となる。之を獨斷的たらざらしめんが爲めには、先づ順序として彼の合理的主義(Rationalismus)に對する態度を述べねばならぬ（これより述べんとすることは彼の宗教觀に關係する、從つてこゝに云ふ合理主義も主として神學上の合理主義をさすのである。）

ランケの修學時代神學界に重きをなせる傾向は、云ふ迄もなく合理主義であつた。彼が學んだライプチッヒに於ても、又その弟ハインリッヒの學んだイエナやハレに於いても神學を講ずる學者は合理主義を奉ずる人であつた。當時の神學者は合理主義者たることを以て誇とし、多くの人々も Rationalist と云へば、これを尊敬したのであつた。當時勿論 Supranaturalist もないではなかつたが、然しこれは合理主義者からは輕蔑の眼で見られて居つた。であるから此の時代の學生に取つてはその何れの思想傾向に屬するかは重大な問題であつたに相違ない。ハインリッヒがまだイエナに居た頃ある時知己の一人が彼に訊いた、卿は Rationalist 或は Spranaturalist かと。當時彼は未だ十六七歳の年少者であつたから無論この兩者の差異を知らなかつたが爲めに大いにその答辯に窮したとは、彼がその回想錄中に云つて居る所

てあるが（(H. Ranke, Jugenderinnerungen, 1877, s. 60.）今若しこの同じ問が當時ライプチッヒに居た其兄レオポルトに向けられたものとすれば、彼は直ちに「余は Rationalist にあらず」と答へたであらう。何となれば彼の反合理主義的傾向は已に、この時代にあらはれて居たからである、彼は合理主義の盛んなる雰圍氣中にありながら、而して合理主義者たることを誇りとし、名譽とせる神學者の敎を聽きながら、毫もその影響を蒙らなかつたと云ふことは一見奇なるが如き觀がないではないけれども、しかもこれは、決して不可思議ではなかつた。彼は初めよりして純なる基督の信者であつた。神の言葉を神の言葉としてそのまゝ受け容れ、理知の發達せる後に於いても毫もこれに對して懷疑の心を抱かなかつた。この點に於ては、彼は弟ハインリッヒとは大にその趣を殊にして居た。後者はイエナよりハレに移り、神學を聽き哲學を究むるに至つて漸次にその信仰に動搖を來し、宗敎的煩悶に陷つたが然し前者にはかゝる經驗はなかつた。一體彼は宗敎上の事柄は只信仰すべきもの、理知を超越せるものと見て居たのであるから合理主義には當然贊成することは出來なかつた。このことは彼が後年その學生時代を回顧し、當時の宗敎觀について云つて居る所を見ても明かである。卽ち彼はその時代の穩和なる合理主義に對してすら、理論としては贊成することは出來なかつたと云ひ、その理由として、絕對的に妥當なるものとして認めらたる神の言葉と一時の議論とを一致せしめんとするが如きは誤謬の甚しきものであると云つて居る。彼から見れば超自然的の事は理知によつて說明せらるゝものではない。そは只信仰の對象であるからであ

る。それ故彼は神の言葉を神の言葉として信じたと云ひ、合理主義は淺薄皮相であると云ひ、最後に彼は Ich glaubte absolut とも云つて居る。（v. Ranke, Z. eigenen Lebensgesch., s. 29）彼はかゝる立場よりして惱める弟を慰諭し、又時には互に議論もした樣であつた。卽ち彼はこれに書を與へて、宗敎は何よりも先づ內心の誠に基くものである。この誠たるや、暴力によるも、推論によるも失望そのものによるも欺くことは出來ない、曲ぐることは出來ないと云つて居るが（a. a. O. s. 146）蓋しその意、宗敎上の眞は何等の私心を挿まず、理窟をこねず、率直にして天眞なると、猶嬰兒の心の如き心によつてのみ理解せらるゝもの、而してこの心は暴力によつて抑壓せらるゝものにあらず、推理によつても欺かるゝものではないと云ふにあつたのであらう。又弟ハインリッヒが、ハレに移りし後、間もなく彼をライプチッヒに訪ねた。當時ランケはルーテルの研究中であつたが談偶その聖餐說に及ぶや、レオポルト大にこれを辯護し舌端火を發するが如くであつたので、彼はいたくこれに感動して、Da wirst du ja eine Säule der Kirche werden と叫んだと云ひ、更に附言して余はもはや信仰を有しなかつたが、兄は依然としてこれをもつて居たことは余の大に悅ぶ所であつたと云つてゐる。（H. Ranke, Jugenderinnerungen, s. 85）元來この兩兄弟はその氣質に於て大に殊なる所があつた樣に見える。ハインリッヒはむしろ刺激され易く、從つて感動し易い。兄はこれに反して保守的であつた。この保守的傾向は後年その政治思想に於て明かにあらはれ來た所のものであつたが、然し單に政治とのみ云はず、又宗敎に於てもそうで

あつた。その幼時、彼が家庭で受け容れた祖先傳來の宗教的信仰は、後に所謂 Wissenschaftliche Theologen の教を聽く樣になつても依然として保持せられた。勿論彼の研究せるルーテルの思想はその信仰を強むるに與つて力があつたらう。又彼の愛讀せるフイヒテの通俗書も彼に大なる感化を與へたらう。何となれば das Unbegreifliche を認めることの出來なかつた啓蒙時代の淺薄なる合理主義は、フイヒテの殊に攻擊する所であつたから。このことは彼が後年ツキヂデス、ニーブル以外、ルーテルとフイヒテとを擧げて彼に大なる感化を與へたるものであると云つて居る所よりしても明かである。(v. Ranke, Sämtliche Werke, Bd. 51-52, S.588 ff) 然しこれ等以外になほ當時の一異彩たりし Fr. H. Jacobi も亦彼に影響したと思はれる。尤も彼はこのヤコビについては何等の感想を述べて居ないが、然し彼が Frankfurt a. d. O. に居た頃はヤコビ對ハマンの書簡はその最も愛讀する所であつたと云ふことであり、又この時代に成れるその處女作 Geschichten der romanischen und germanischen Völker の序文中にはヤコビの言を恰もモットーの如く擧げて居る所を見ても、彼のランケに影響する所あつたことを推測するに難くない。少なくともこの兩者の思想に於て相通ずる所あつたことは明かである。ヤコビは何人も知るが如く信仰哲學者或は感情哲學者と呼ばるゝ程であるから、合理主義には無論反對であつた。彼によれば實在は感性的なものですら、悟性によつて理解することは出來るものでない、況や、超感性的なるものに於てをやである。實在は只感情によつて知り得るのみである。神は理知を超越するもの、只信仰の對

象となるものである。この信仰の對象たるべき實在を悟性の力で摑うとしても到底摑むことは出來ない。悟性は只表象の世界、概念の世界、相對の世界に限らるべきもので實在の世界、絶對の世界にはその手は屆かないからである。實在は只感情によつてのみ理解することが出來る。「光はわが心の中にあり。これを悟性の中にもち込めばそは忽ち消える」とはヤコビのいふ所である。彼は一般哲學に於て合理主義に反對したるのみではない、宗教に於ても反合理主義的であつた。眞正なる「Theismus」は決して論理的概念的に說明し得るものではない。宗教上の眞は純なる心にのみ啓示せらるゝのであるとは彼の信念であつた。然しながら今これ等の事を詳しく述ぶることは予の目的ではない。要は只彼が合理主義に反し啓示教を奉ずる點に於てランケの思想と相通ずる所があつたと云へば足りる。何れにしてもランケの反合理主義的思想傾向は以上述べた所によつて明かであるが、これがその史學研究に現はるゝと同時に、他面に於ては歷史哲學に反對する因となるのである。

然らばこの反合理主義的思想はその史學研究に如何に現はれたか。これを叙ぶるに先つて先づその宗教對歷史の關係を觀察せねばならぬ。何となれば彼とこれとは互に相關聯せるものであつて、後者のみを切りはなして說くことは出來ないからである。順序として再びこゝにヤコビを出す。彼は感覺や表象の世界を以て主觀の所產でもなければ、又イリュージョンでもない、それは實に客觀的實在そのものゝ顯現である、オッフェンバールングであるとする。而して彼はその客觀的實在の根源をば神にありとす

る。この思想を吾人はランケの史觀に適用することが出來る。ランケは史的現象を以て史的實在の顯現であると見、而してその實在の原因は神であると云ふ。然らば余がこゝに史的實在と名けたものは彼にあつては何であつたか。彼は云ふ、それは力である。但しその力は暴力と云ふ樣なものではなくして精神的な、生命を產出する創造的な力である。道德的な力である。生命そのものでさいあると。(v. Ranke, Abhandlungen und Versuche, I. samml. s. 39) 彼はかく見るが故にこの生命を覺知すると云ふことを以て史學の仕事であるとせんければならない。何となれば吾人はこれを覺知する時一方に於ては史的現象を理解することが出來るし、他方に於ては神意を想見することが出來るからである。それであるから彼は Das Geschäft der Historie ist die Wahrnehmung dieses Lebens と云つて居るのである。(Über die Epochen der neueren Gesch., Vorwort, s. 4) 然らばその生命とは如何。それは云ふ迄もなく、精神的なものである。己れの內に藏する理想を實現せんとする生命である。更に問ふ、然らばその理想の內容は如何と。こゝ迄疑問を進めて來ると、彼はその反合理主義的思想をあらはさねばならない。否、史的實在を精神的生命なりとするとき已にこの思想傾向はあらはれて來るのである。この精神的生命は隱れたるもの、見えざるもの、そは只心眼によつてのみ知覺し得るものである。卽ち直觀し得るもの、同感し得る丈けのものである。從て又それは定義したり、抽象概念によつて表はしたりし得るものではない。彼はいふ、anschauen, wahrnehmen kann man sie (die Kraft;) ein Mitgefühl ihres Daseins kann man sich

erzeugen と。(v. Ranke, Abhandlungen und Versuche, s. 39) 又その Epochen d. n. Gesch. の中にもこの生命は一つの思想、一つの詞によつて示され得るものにあらず (Dieses Leben lässt sich nicht durch Einen Gedanken, Ein Wort bezeichnen.) といつて居る。已に生命に於てそうであるとすれば、その實現せんとする理想を概念的に規定し得ざるはいふ迄もない。それであるから彼はその「政治に關する對話」中に於てカールと云ふ人物が「生命は如何なる理想へ向ふものなりや」と訊ねたのに對して、ランケを代表するフリードリッヒが、當然答ふべき答を答へずして、一切の生命はその理想を己れの中に藏すといひ、更に附言して精神的生命の眞の衝動はイデーへの運動であるとしかいひ得なかつたのである。(v.Ranke, Sämtliche Werke, Bd. 49-50, s. 337.)こゝにいふイデーは實現せらるべき目的、理想であるが然しそれは生命以外に存するものではない。否このイデーこそは生命の根源、その本質、或はその精神でさへあつた。であるから生命のイデーへの運動とは生命が己れの本質を實現せんとする活動であるといふことが出來る。然しながらその本質は如何なるものであるか、イデーの內容如何、これは初めより規定することは出來ない。そは只歷史的發展中に於て顯現し來る結果を見て、初めて記述し得るのみである。

この實現せらるべき本質、卽ちイデーは彼によれば神に出づるものである。そは彼の語をかりていへば Gedanken Gottes である。神が人類に吹き込める息である。人類をしてしかく〳〵たらしめんとするそ

の思である。であるからこれを人類の方より云へば、この與へられたる神の思を實現すること、これ卽ちその本質を實現することであり、而して同時に神の命を果すことである。彼はいよ、「國民が人間精神に新しき表現を附與し、獨自の形式に於て之を發揮し、これを新に啓示する所に、その存在の條件が存する。これ實に神の國民に委托する所である」と。斯くの如きイデー神源說は彼が三十年代に於て主張する所、殊にその國家論はこれを基礎となすものなることは、彼が歷史政治雜誌に載せたる諸論文、就中その獨佛論や、「政治に關する對話」に於て吾人の看取し得る所のものであるが、然しこれが又その一般史觀の根柢にも存するのである。

彼はその宗敎觀よりすれば全人類を一統體としてそのイデーに着眼すべきであつたらう。然しながらその史學研究の出發點は已に先に述べた通り、特殊的なるもの、卽ち國民或は國家であつたから、これにそれ〴〵のイデーを認め、而してそが如何に實現するかを究めねばならなかつた。彼はいよ、「人類のイデー——これを神は種々なる民族に於て現はす」と。然しながらこれは人類のイデーが個々の民族を通して漸次により善く實現せらるゝを意味せるものと解すべきではない。若ししか解すべきものとすれば、後の時代の民族は先行民族よりも優秀なるものとなるであらう。或は前代の民族は後代の民族の爲めにその準備として或はその手段として存するが如き結果となるであらう。然しながらランケによれば各民族、各時代は神の前に於ては平等である、一國民は他の國民の爲めに、一時代は後の時代の爲めに

存するのでない。それ等は何れも獨自の價値と意義とを有する。如何なる時代、如何なる國家と雖もそれ自らの目的をもつて存在するのである。であるから上に擧げたる句も人類のイデーを總括せるものと解さなければならない。史家としてのランケにとりては民族は個體であり、單元であり、又言はゞサブシタンスでもあつた、又彼のいつて居る樣に特殊の生命を有するものであつた。そは決して普遍的なるものより割り出し得ざるもの、よし、特殊の事情のこれに加はることありとするも、これによつて特殊のものが成立するのではない。ランケより見れば地球が海洋山川によつて切斷せられ、從つて人類が互に分離せらるゝが故に、種々なる國民や國家が出來たのではない。その特殊性は根本的なもの卽ち、神に出づるものである。勿論ランケはすべての民族に共通なる所謂 Idee der Menschheit を否定するものではなかつた。然しながら史家としてのランケはこれをその研究の對象とすることは出來なかつた。まして これをその研究の原理とすることは彼の反對する所であつた。「普遍的な人の立場よりすれば、或は Idee der Menschheit なるものあらん。而してそは歷史上偉大なる國民に代表せられて漸次に全人類を包括するに到らん……史學研究はかゝる思想に反對するものではない。然し又これを證明せんとするものでもない。特に避くべきはこの思想を歷史の原理となさんとすることである」とは、彼がバイエルン王マックシミリアンに對ふる所であつた。かの如く普遍的なる一つの Idee der Menschheit は史學研究の目的物にあらず、又その原理でもない。その任務は却つて各國民の個性或

はそのイデーが世界史的過程中に於て、換言すればそれ等が互に結合し、軋轢し、分離し、爭鬪しつゝある間に於て如何に實現し來るかを知る所に存する。彼が「政治に關する對話」の終りに於ていふ所はこの意を表明せるものに外ならない。即ち彼はこゝに分離獨立せる國家の存在を認め、更にそれ等が各々獨自の方法によりて己れの個性、己れのイデーを世界の紛糾場裡に發展するものなることを述べ、最後に彼はこれ等諸國家の軌道、その交互關係、その體系に注意することの肝要なるを說いて居る。又彼はその列强論の末尾に述ぶる所も言を異にしてその意を同うするものと云ふべきである。即ち彼は諸國家諸民族に內在する力が互に相爭ひ、或は榮え或は衰へ、或は死滅し、或は復活し、互に影響してはその內容を豐富にし、その價値を高め、その範圍を擴むる所に、換言すれば國民相互の爭鬪、その交互作用中に於てそれ等のイデーが實現し來る所に世界史の祕密が存すとなして居る、この故に彼の世界史は只一つの普遍的なる人類のイデーが特殊民族によつて、代表せられつゝ漸次に發展し來ると解する人々の世界史とは大にその趣を異にして居たものと云はねばならぬ。

彼によれば個々の民族のイデーは神の思である。故にこのイデーが如何に歷史に現はるゝかを知る時神意を了解することが出來る。而して彼がこの神意の了解を以て史學研究の最後の目標とせしものなることは、先に引用せる彼の言によつても明かであるが、更に彼は fern, fern sehe ich mein wahr es Ziel, Bei diesem wahren Ziel, hoffe ich, finden wir uns zusammen, es seien auch unsere Bahnen verschieden

と云つて居る。これは實に神學の研究に從事中であつたその弟ハインリッヒに送れる書簡中の一句なることを思はゞ、その終局の目的の那邊に存したかは謂はずして明かである。

斯くの如く彼が最後の目標とせし所のものは、實に宗教的眞理であつた。併しながら彼がこれに到達せんとする道は歷史に存した。彼は深く且つ廣く歷史を研究する時、彼はそこに神を認め得べしと信じた。何となれば歷史現象は民族精神の發現なるが、併しこの精神、或はそのイデーは神より出づるものであるからである。併しながらそのイデーの內容は如何なるものであり、そが如何に實現し來るかは、固より先天的にいふことは出來ない。そは一定の詞、一定の概念によつて表示せらるゝものではない。何となれば彼のイデーは各民族に共通なる、抽象的、普遍的なるものではなくして、個々の民族のイデーを包括せるもの、從つてその內容は非常に多樣豐富であるからである。又その實現の方法も決して論理的に概念的に解し得る程合理的なるものではない、むしろこれには吾人の思量し得ざるものが存在する。彼はいふ「人類は無限に多樣なる發展性をその中に藏して居て、それが次第に顯現し來るものである。但しその顯現し來るや、不可知なる法則に從ふもので、世人の思惟するよりも一層神祕的であり、一層偉大である」と。(Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte, 1. Vortrag) 彼はかゝる見地に立つが故に勢、當時の歷史哲學には反對せざるを得なかつた。「哲學者が哲學者として歷史に關係するや、歷史を待たずして明かなる Weltplan の糸をたどる。その歷史を使用するは史實によつて之を證明

せんが爲ではない。何となればその命題は歴史以前に、歴史と關係なく明かにせられあるが故である。この故に哲學者が歴史を用ふるは歴史を待たずして理解せらるゝものを歴史によつて具體化し、かくしてこれを說き明かさんとするに過ぎない」とするフィヒテと史的事實を通じて人類の理念を理解せんとするランケとはその方法に於て如何に異なつて居たらう。又すべて合理的なるものは現實的であり、現實的なるものは合理的であるが故に、史的發展はすべて論理的範疇に從ふと解するヘーゲルの見方と人類の發展は不可知的なる法則に從ふと信ずるランケの見方との間には非常なる相違があつたといはねばならぬ。これ等の哲學者は一定の哲學說より歴史を解釋せんとしたのであるが、ランケはこれに反して一切の理論を排斥した。彼は單に哲學說に縛せらるゝを避けたのみではない、又神學說にも、道德觀にも、更に又政治說にも。勿論彼と雖も人として、或は實際家として一定の宗敎觀、道德觀、政治觀を有し、人生と社會とは當にしかあるべきものとの理想を具へて居たに相違ない。併しながら彼はかゝる理想を原理として歴史を說くを欲しなかつた。何となればかゝる方法によつては史實が拘束せらるゝを免れなかつたからである。彼の最も重んじたるは史的事實であつた。彼は飽く迄も客觀的事實にその研究を立脚せしめんとした。反面よりこれをいへば認識する主觀の分子は全然これを除外せんとしたのであつた。而して唯かゝる見地よりする時歴史に內在する普遍の意義が直觀せられ得べしと彼は信じた。彼は經驗と理想とを、事實と理論とを、研究と思索とを分離し、かくて前者を後者の束縛より脫せ

しめんと欲したのであつた。かく觀來れば史家としてのランケはその方法に於て、又その結果に於いて經驗史家の立脚地を出なかつたものと云はねばならぬ。勿論彼は史的現象の彼岸に實在的なるものを假定したけれども、しかもそれは吾人の直接に把握し得る所のものではない、唯その結果たる史的事實よりしてこれを推知することが出來る丈けである。併しながらよしそれが推知し得られたるにせよ、そは決して一定の名稱によつて表示し得らるゝものではない。この故に結局彼にあつては客觀的事實をそがある通りに記述する以外に途はなかつたと云はねばならない。彼はその處女作 Geschichten der romanischen und germanischen Völker の序言中に「世人は史學に課するに過去を裁き、將來の爲めに現代を教ゆるの職を以てせんとする。かゝる高尚なる職分はこの書の敢て果さんとするものにはあらず。そは唯單に元來ありし通りを示さんとするのみである」と云つて居るが彼の立脚地よりは勢しかなければならなかつた。何となれば過去を裁判せんとすれば當然一定の理想を要するが、併しこの理想は彼の史學研究に容るゝを許さなかつた所であるから。併し彼の立脚地よりすれば啻に過去を批判し得ざるのみではなかつた。又歴史の體系化も不可能である。體系化には一定の原理を要する。然るにこれを初めに立つるは彼の方法とは矛盾するからである、かく云へばとてそは勿論彼を批難するの意味でない。余はむしろ彼がプラグマチカーに、而して又歴史哲學者に反對したる所を彼の長所として認めんとするものである。客觀的事實を公平無私なる立場より研究せんとせし所に、實に史家としてのランケの生命は存したからである。

ランケの史觀は或は歴史的神祕主義なりと云はれ、(K. Lamprecht, Alte und neue Richtung in der Geschichtswissenschaft, s. 47.)或は毫も神祕的なる所なしとせらる。(Otto Hintze, Historische und Politische Aufsätze, 4. Bd., s. 9) これは共にランケのイデーを基礎としての主張であるが、かく矛盾する主張の成立するには、當然の理由が存在する。ランケは一方に於ては強烈なる宗教的興味を有して居たが、併し又他方に於ては非常に史的經驗を重んじた。彼は前者よりしてはそのイデーを以て神に出づるもの、一定の概念によつて規定し得ざるもの、吾人の窺知し得ざる神祕的なる法則に從ふものとなす。併しながら彼は後者よりしては之を以て各時期を支配する大傾向、卽ち時代の大勢なりと說く。例へば彼は第十五世紀及第十六世紀の前半に於ては藝術最も盛であつたが、第十六世紀の後半に於ては文藝衰微し、宗教これに代りて大なる傾向となる、第十八世紀に於ては功利主義的努力が大なる勢をなすと云ふ。併しこの樣な精神的傾向が彼の所謂 leitende Idee であるとするならば、そこには毫も神祕的なる所ありと云ふことは出來ない。かゝる大勢は史學研究に從事するものゝ敢て理解し得ざるものではないからである。この故に主としてイデーの起源に觀點をおくものは彼を以て神祕的なりとし、その結果或はその現實にあらはれた相に着眼するものはこれに反して神祕的ならずと主張するものと云ふべきである。